月刊ウィーン GEKKAN-WIEN 2013年12月号

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊25年目
創刊 1989年 Nr. 294

Albertina "Matisse und die Fauves" André Derain Big Ben, 1906/07 Öl auf Leinwand Musée d'Art moderne, Troyes Foto:RMN-Grand Palais/Gérard Blot © VBK, Wien, 2013

杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 27

十一月十一日～十四日にかけて、米国原子力学会冬の大会がワシントンで開催された。今年は核分裂が発見されて七五周年に当たることから、特別イベントの企画があった。米国を中心に世界各国から約千四百名の参加があり、我が国からも産業界、研究所、大学等から約三十名の参加があり盛り上がった。開会ではモニツ・エネルギー省長官、シュルツ元国務長官などから祝辞があり、特別セッションでは、米国原子力学会長、科学アカデミー会長、工学アカデミー会長、規制委員長などからスピーチが述べられた。夕食会ではピューリッツアー賞のロード氏の話が面白く、米国らしく全体に華やかで、かつ原子力発電ばかりでなく、医療、工業、農業等への放射線利用も含めて、今後の世界的な原子力利用の重要性と発展を強く訴える内容であり、明るい原子力の将来が語られた。

その後は分野毎に分かれて研究発表が続いた。筆者は最終日に「溶融炉心コンクリート反応時における上部クラストへの注水による除熱特性」と題する発表を行った。溶融炉心コンクリート反応時の溶融炉心の冷却性は不確実性の大きい課題であり、単純な実験によりクラストの性状や非凝縮性ガスの流量が冷却挙動に及ぼす影響を検討したものである。朝一番八時からの発表であったが、前日より多くの人が聴きに来てくれた。午後は、世界初の原子力商船サバンナ号の見学ツアーに参加した。一九六一年に建造され、一九七〇年に役目を果たして引退しているが、思ったより大きく立派で、しっかりと保存されていることに感激した。会合中に何人かの旧友に再会できたのが嬉しいことであった。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の有名な市場について述べてみたい。ウィーンの市場と言えば、ナッシュマルクトが有名である。約百二十に上る店舗により、果物や野菜、肉、魚などあらゆる食材、ウィーンからインド、ベトナム、イタリア料理まで、世界各国の食品や料理が供され、訪れる人々も国際色豊かである。あらゆる年齢層の出会いの場でもある。周辺には和食材を供している日本屋があり、小次郎寿司を始め美味しいレストランが多い。土曜日毎に開催される蚤の市も有名であり、衣料、靴、家具、絵、彫刻、雑貨など多くの店を廻って掘り出し物を見つける楽しみがある。

一方、京都の市場と言えば、錦市場商店街が有名である。江戸時代に魚問屋の称号を許され魚市場として栄えたことが始まりであり、四百年の歴史がある。昭和二年に中央卸売市場が開設されたのを機に、徐々に現在の姿に変わってきた。百二十以上の店舗が狭い錦小路の両側に約四百メートルにわたって軒を連ねている。京都の旬の食材や京野菜、京漬物、湯葉、鰻、佃煮、蒲鉾、乾物、干物、茶、菓子、寿司、豆腐に至るまで手に入る。試食できる店も多く、そのまま店で食べることもできる。両市の市場とも、地元を始め多くの観光客が訪れ、店の人達と話しながら大勢の人で賑わっていることが共通している。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、土曜日に家内とナッシュマルクトへ行き、キャベツの漬け物、ザクロなどをよく買い、また蚤の市を見て歩いたものである。京都では、休日に家内と錦小路を訪れ漬け物や豆腐などを買っている。両市の有名な市場を日常的に訪れることができた幸運に感謝しつつ、ナッシュマルクトからはやや遠いが、そろそろ町にもクリスマスの飾りが見られるようになってきたので、イルミネーションとして大きな明かりが点灯されるグラーベン通りを描いたスケッチを掲載させていただく。

■杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長■